



関東を代表する一級河川利根川の支川、小野川は、江戸時代に舟運の集散地として賑わった川で、香取市の水郷、佐原を南北に流れ利根川に合流しています。

江戸時代、利根川の舟運は、徳川家康による利根川東遷事業によって大きく発展し、各地に船着場となる河岸(かし)が設けられました。小野川も、江戸へ物資を運ぶための航路として河岸が栄え、沿川には問屋、醸造業、倉庫業などが軒を連ねました。昭和の初頭になると、陸上交通の発達により舟運は衰退してしましますが、当時の名残を感じさせるまち並みは今もなお残されています。

平成3(1991)年、「NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会」が発足し、小野川の清掃やまちづくり団体等との交流、ガイドボランティアなど、小野川と佐原のまち並みを保全し、歴史・文化を伝える各種活動が取り組まれるようになりました。平成8(1996)年には、関東で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」に小野川沿川が選定され、文化財としての価値が認められました。また、平成14(2002)年には、市民・佐原商工会議所・佐原市の出資で第三セクター「株式会社ぶれきめら」が発足し、舟運の復活を機軸としたまちの活性化が図られています。平成22(2010)年には、小野川の河口、利根川との合流点において、新たな交流拠点「水の郷さわら」がPFI事業により整備され、ますます地域の賑わいが高まっています。

一方、平成20(2008)年には、利根川沿川19市町村による「利根川舟運・地域づくり協議会」が設立され、

舟運、河川空間、地域資源を活用して、利根川を交流・連携軸とした様々な社会実験を実施しています。小野川においても、舟運と歴史的まち並みを活かした魅力的なイベントが行われています。



小野川河川清掃



水の郷さわら(乗船場)